

# 時空の漂泊

(二〇〇五年四月十五日 第十一号)

高橋 滋

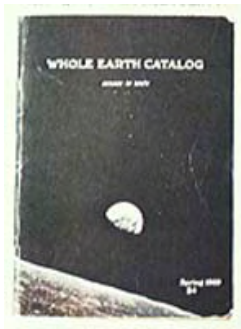
## 広島便り2

### 自分で家を建てるといふこと

手元に二十年あまり前の「ウッドイライフ」という雑誌(ムック)の十九号(「山と溪谷社」一九八六年三月)がある。山と溪谷社は、一九八二、八三年ごろからログハウス<sup>①</sup>の作り方や「アリス・ファーム」<sup>②</sup>のカントリーライ

- ① log-house 丸太を組んで造った家屋。
- ② 一九七三年 藤門弘、立教大学ヒマラヤ遠征隊に参加。宇土卷子、東京外語大のグループでインド旅行。ニューデリーで合流し、陸路ヨーロッパ方面へ旅行、田舎の暮らしを計画。
- 一九七四年 帰国後、岐阜県・有楽の里に生活の拠点を作る。地名をもとに「アリス・ファーム」と名付け、家具工房、染織工房、農業などを開始。
- 一九八一年 「カントリーライフのすすめ」出版。
- 一九八三年 創立十年を機に北海道に移転。
- 一九八六年 観光施設「羊ヶ丘牧場」を開設。来場者が年間二十万人を突破。
- 一九九七年 新本部を建設。

フの紹介に力をいれてきた。この号では、木工や田舎暮らしはもとより、井戸掘り、アマゴ<sup>③</sup>の育て方から、バイオマスを先取りする「おが屑」<sup>くず</sup>からのガス化発電など幅広いテーマが取り上げられていた。



この二十年程前の一九六八年にはアメリカで「ホールアースカタログ」という記念碑的な出版物が発行された。白黒の写真で埋め尽くされた、電

- ③ 二〇〇一年 ブルーベリーの摘み取り園を開設。
- ④ 甘子…日本特産の溪流魚。体形はヤマメとよく似ており、背部は帯緑褐色で小黒点があり、腹側は銀白色。体側には斑紋を持つ。ヤマメと異なって側線の上下に鮮麗な朱赤点が散在する。溪流釣りの対象として価値が高く、きわめて美味である。養殖技術が著しく進み、とくに本州の各河川の漁業協同組合はアユ、ヤマメとあわせてアマゴの河川放流を行う所が増えている。

情報が何でも載っている」という印象のものだった。購入できなかったが、丸善の売り場に平積みされていた様子が記憶に残っている。



「ホールアースカタログ」に代表される一九六〇年代に現れた自然に忠実であろうとするヒッピー<sup>④</sup>の生き方は、一九七〇年代に入ってまとめられた「地球の上に生きる」(アリシアベ

- ④ ヒッピー…一九六〇年代、ベトナム戦争を契機に戦争と物質文明を否定し、宗教と自然回帰を呼びかける若者たちのグループが現れ、ヒッピーと呼ばれた。この思想・行動は世界中の若者たちへ波及し、「ラブ・アンド・ピース」を合言葉に、長髪・Tシャツ・ジーンズというスタイルが一九七〇年代にファッションとして世界中に広まった。



までも継続して発行されている。

「この本は、生活費をかせぐためにせつせと机で事務をとつたりするよ

り、森で木を切っていたという人の

ために書きました」という書き出し始

まり、大地のリズムに従って生活する

術<sup>すべ</sup>が記述されている。アリス・ファー

ムの出発もこの頃であり、私の世代の

田舎暮らしの原点もこの辺りにある。

「ウッドライフ」の十九号が出た

一九八六年は、建築基準法が緩和され

て、ログハウスが一般住宅として普及

する起点に

なった年で

ある。それ

までは特殊

構造物とい

うことで建設には建築大臣の許可が  
必要だったが、この年に一般的な基準  
が出されて、誰でも建設することが可  
能になった。

その流れに乗って「ウッドライ

フ」は「夢の丸太小屋に暮らす」(夢

丸)というログハウスの専門誌に発展

した。「夢丸」は、一貫して「手作り」

をサポートしてきている。丸太から作

る場合は、皮むきやノッチ<sup>⑤</sup>の加工な

ど組み立てる前の手作業が多くあり、

「手作り」という言葉がふさわしい。

もともと、ログハウスは自分で建て

ることから始まったものである。アメ

リカの西部開拓史の児童書、ワイルダ

―著「大きな森の小さな家」などには、

森林地帯での開拓は、まず木を切り、

丸太で家を

建て、そし

て耕作地を

開墾して行

くという過

程が分かり

やすく描か

れている。



そうした伝統が、大きな丸太を組み  
上げて作るログハウスには受け継が  
れており、カントリーライフの夢をか  
きたてる。

一九八五年に山と溪谷社から発行

された「ログハウスのつくり方」(ダ

ン・ミルン…三浦亮三郎共著)は、ログワ

⑤ Notch: V字形・U字形などの切り込み。溝。

ークの基礎からの手ほどきが細かく書かれており、ログハウス作りのバイブル的な本となった。ログハウス作りのスクールが開催され、チェーンソーなどの周辺機器も普及した。

建築基準法はその後も徐々に緩和され、ログ工法も普及し、「マシンカット方式」という、下ごしらえした材料を工務店などが建てる方式が一般的になり、さらに進んで組立だけで済むキット商品も出てきている。

丸太という、大きくて寸法も一定していない扱いにくい材料の調達から加工・組立までを自分一人でやるのは並大抵のことではなかった。しかし、マシンカット方式やキット商品の普及によって、自分で家を建てるという

「セルフビルド」が市民権を得るようになったと思う。

今は雑誌やカタログも多くあり、その中から好みのものを選んで、注文すれば、後は、それを自分のペースに併せて組み立てることが出来る環境が出来上がっている。ちなみに「セルフビルド」をYahooで検索したら、一万件以上のヒットがあった。関心の高い人にはまったく無縁の世界だろうが、すでに日本語としても定着しているようである。

### ツーバイフォー

「セルフビルド」というとまずログハウスを思い浮かべるが、それとは別の流れも育ってきている。「ツーバイフォー工法（枠組壁工法）」と呼ばれ



るものである。⑥ ちなみに「日曜大工で建てる夢の手作り

マイホーム」(藤岡等著、山海堂：二〇〇〇年)とか、「キットでつくる2x4住宅マニュアル」(越澤治著、山海堂：二〇〇四年)など一般的な本が数多く出版されている。

「ツーバイフォー工法」で使用される材料は通常「SPE」⑦と呼ばれるも

⑥ 米国やカナダで一般的な木造住宅の工法。規格化された木材でつくられ、その主要断面のサイズが二インチ×四インチ (two-by-four) に近いことから、ツーバイフォー工法と呼ばれる。日本では、正式には「枠組壁工法」(wood frame construction) と言う。枠組みに構造用合板を張って、壁・床を作る。在来工法のような柱を問わずに住宅を作ることができる。使用する木材の種類が少なく、また接合には金物を用いるため、熟練技能をそれほど要さず、工期も比較的短い。  
⑦ 亜寒帯針葉樹林に生育するスプルース (Spruce: ヒノキ)、パイン (Pine: 松)、ファー (Fir: ヨウモク) の総称。いずれも成長が早く安価で、主にツーバイフォー住宅の構造材として使用されている。

のである。これは単一の樹種を指すものではない。北米などの森林地帯に生育する針葉樹（モミやマツなど）を乾燥した後、規格に従って製材、加工（表面カンナかけ、面取りなど）したものである。

二インチ×四インチ（乾燥・加工後の実寸は三八ミリ×八九ミリ）で、長さ八フィートのものが、ホームセンターで四〇〇円程度で販売されている。一立米<sup>リョウブク</sup>で五万円以下。これは町の材木屋でスギやヒノキを購入した感覚からすると驚異的に廉価である。

日本の木材の価格は伝統的に高く、乾燥も不十分だったが、この「SPE」の普及で、ウッドワークの世界は大きく変わった。（ちなみに材木の自由化

は、平成元年、一九八九年の「包括貿易法」、いわゆる「スーパー301条」の優先慣行認定に基づくものだと聞く。ブッシュ来日のイベントがきっかけだったのかと思うと、ちょっと複雑な気持ちに襲われるのだが……）。

### キット自作住宅

さらに部材寸法やジョイントなどを標準化してキット化した自作住宅もある。建築という分野は工学の中でもアートに近い性質を持っていて、建築家という「個人」が表面に出て主張できる世界でもある。

その一つが「Be-h@us」というシステムハウスである。主唱する建築家は自分とほぼ同世代の一九四二年生まれ。前述の「ホールアースカタログ」

に感銘し、マツキントシユの自在性に感化され、道具にこだわり、おもちゃを愛する人物だという。その感性の延長線に実現した「Be-h@us」には、レゴでお城を作るような遊戯性がある。その著書「Be-h@usの本」（秋



山東一、九  
天社）は、  
「セルフ  
ビルドす  
る木の家、

インターネット時代の自立知的住宅」を謳っており、独特な提案である。

「ホールアースカタログ」を起点としながらも、コンピュータ・システムの洗礼を受け、他とは違ったフレーバーの「セルフビルド」の世界の構築を提唱している。

まだ、他にもある。ともかく「セルフビルド」の世界はのめり込んでみると、実に奥が深い。欧米流の台頭に対しては、仕口（継ぎ手）の手ほどきから始まって、伝統的な軸組み工法を勧める本もある（「100万円の家づくり」小笠原昌憲、自然通信社）。地元の材料



を利用するならば、やはり伝統工法ということなのだろうか。

### 結局、「ツーバイフォー工法」を選択

以上のように、「セルフビルド」を決意したものの、それをどのように行うかということでは、どれもが魅力的に見える様々な選択肢があった。しかし、狙いとする仕上がり、使える時間

とエネルギー、仲間、力量、それに好みなどを勘案し、どれかに決めないことには先に進まない。

私は、壁材や建具まですべてをキットで購入することには抵抗があった。

「もの作り」の楽しみのかかなりの部分は、限られた寸法（間取り）を前提に、部品や材料を探しながらプランを練り、道具を探して加工法を検討するプロセスに宿ると思っているからだ。

と言って、それらを最も楽しめそうな自由度の大きい伝統軸組み工法に挑むには、年を取りすぎている。柱材一つ一つ墨付けし、「ほぞ」や穴を穿うがつのは大変なエネルギーが必要だろうし、重たい梁を目の高さ以上にあげる作業も想像すると恐ろしかった。

いろいろ検討した挙句に、結局、「ツーバイフォー工法」を選択することにした。森林ボランティアで森の整備もやっているのだから、間伐材かんばつぎの活用も検討した。たくさん放置されているからだ。しかし、それを建築資材として使うためにまとめて取り出すことは個人では不可能な作業だと悟った。

直径二五センチの生木は、一メートルの長さでも四〇キロ以上の重さがある。家を建てるために必要な量の間伐材を林内から搬出するには、大型の装置がなければ不可能である。運び出したとしても、その乾燥（保管）と加工に、さらにコストがかかる。農業は小さいスケールでもそれなりに可能だが、林業は個人のスケールでは実現性がないと改めて思い知らされた。

「ツーバイフォー工法」は北米の住宅では標準工法である。枠を組んで構造用の合板を貼り付ければ、垂直方向も水平方向も強度が出る。枠を組む基準ピッチに従えば、外壁や内装材も無駄なく標準品が使える。ホームセンターには、材木だけでなく、窓やドアなどの建具も電気や水周りの設備なども、取りあえず揃えられている。

日本の伝統的な軸組工法は、ジョイント部分で強度を出すもので、ここがしっかりと加工できなければ家ができない。畳や建具も本体に合わせて調整しなければならぬ。いずれも素人には手が出しにくい世界である。

欲しいものがすべて手に入るといふ状況ではないものの、「ツーバイフ

オー工法」であれば、なんとか希望に沿った建物を作れそうだと判断した。

ちなみにインターネットで調べたら「ツーバイフォーを一人で建てる」というホームページがいくつかあった。ログハウスも軸組み工法も一人では建て方（上棟）はできない。どうしてもチーム仕事になってしまう。それに対して「ツーバイフォー工法」であれば、なんとか一人で建てられそうだと再確認した。

設計しながら、どうやって組み立てるか頭の中でシミュレーションした。壁面を立ててみる。仮止めして、ほかの壁を立ち上げ、つなぐ。その上に小屋組みを持ち上げる。屋根根太をはる。そうしたら、どうやら最小の手助けで作れそうに見える。見通しが得られた。

私が、これから作るのは小さな小屋だが、家を自分で建てるという行為は、時空を超えて、何ものかに回帰するものはらんでいるように思う。